

パウロにおける労働

The Labor in Paul

楠 本 史 郎*

要旨

パウロの手紙に、直接、勤労を勧める言葉は多くない。しかし彼自身、労働に従事した。1テサロニケ書では、キリストの再臨を誤解して職業労働を軽んじた人々に対して、日常生活を整え、仕事に励むよう勧告している。パウロの主要な関心は、キリストの福音とその宣教にあった。1コリント書7:17-24を直ちに、職業を天職として勧めたものとは見ることができない。しかし福音の核心を見つめ、キリストの再臨を待ち望んだからこそ、彼は職業労働の意義を認識していた。

キーワード：パウロ／職業／再臨

はじめに

いわゆるキリスト教世界では、聖書は神の言葉として人々に多大な影響を及ぼしてきた。とくに16～17世紀の宗教改革以後、聖書は各国語に翻訳され、広く読まれるようになる。そのため、聖書の言葉とその解釈が個人の思想と行動に、より直接的な影響をもたらした。その影響はただ個人のみに限らない。社会全体を変える契機となりうる。

マックス・ヴェーバーは、ピューリタンの信仰が伝統的な職業観を革新し、そのことが近代産業社会を形成する梃子となったと結論付けている¹⁾。宗教改革者マルチン・ルターは、聖書の神の召しを「職業 Beruf」と訳した。ピューリタンはこれを神の言葉として受け止めた。さらにジャン・カルヴァン等の影響を受け、二重予定説によって、世俗の職業労働に従事することが神の召命であると信じた。こうして勤労を尊ぶ社会倫理が確立される。それにより資本が蓄積され、近代産業社会と資本主義の精神が発生したと分析する。

しかし聖書本来の職業観とはどのようなものなのか。すでに、旧約においては世俗的職業労働が重んじられていることを確認した²⁾。ヤーウェ(J)資料は労働を人間の本質的な部分とした。箴言など知恵文学は勤労を善とし、幸福の条件と見る。個人倫理の色彩が強い。預言者は労働者を抑圧する支配構造にも目を留め、労働が、それにふさわしい果実を産む社会を実現することが、神の意志だとする。旧約は職業労働を肯定している。

新約の場合はどうか。イエスは直接、労働を評価する発言を残してはいない。しかしイエスが職業労働を否定的に見たとは言えない。彼自身が労働者であった可能性が高い。イエスは世俗的職業労働に従事する者たちと積極的に接触し、弟子の中にも迎えている。その譬話にも、日常的労働の光景を多く取り入れられた。イエスは、迫り来る神の国の福音宣教に専念し、職業労働に直接言及しなかったが、労働者たちと親しく交流し、世俗の職業に対して好意的であったと思われる³⁾。

本稿では、パウロが職業労働をどのように見ていたかを取り扱う。パウロは初代教会における最大の異邦人伝道者だった。彼によって確立されたイエス・キリストの福音理解は、ユダヤ教の枠を越え、世界伝道を進める中心的な思想となった。

* KUSUMOTO, Shiro
北陸学院大学 人間総合学部 社会福祉学科
キリスト教入門

彼自身、アジアからヨーロッパへと伝道旅行を重ね、主要地方都市に教会を建設していった。彼が諸教会宛てに認めた手紙は、初代教会形成に大きな力となった。また新約中最古の文書として読み継がれ、教会に影響を与えてきた。キリスト者の思想、生き方を定める大きな要素となっている。

パウロが世俗の職業労働をどのように見ていたかは重要である。ここでは、広くパウロ真正の書と認められている7つの手紙をおもな資料とし、これに使徒言行録を加える。その上で、パウロ自身が世俗の労働に従事する職業人であったのかどうかを検討する。さらに彼は職業労働を肯定的に見ていたのかどうか確認する。そしてそれにもかかわらず、パウロが職業について積極的に発言していないとすれば、その理由は何か、考察する。

1. 資料

パウロの職業観を知る上で重要なのは、パウロ自身の書いた手紙である。また一方、パウロの伝道について記録されている使徒言行録もまた重要な手がかりとなる。

1) パウロの手紙

(1) 新約には、パウロの手によるとされる13の手紙が存在する。しかし一般にパウロ真正の手紙と認められているのは、ローマの信徒への手紙(以下では、ローマ書と記述する)、コリントの信徒への手紙一および二(1および2コリント書)、ガラテヤの信徒への手紙(ガラテヤ書)、フィリピの信徒への手紙(フィリピ書)、テサロニケの信徒への手紙一(1テサロニケ書)、フィレモンへの手紙(フィレモン書)の7書に限られる。

それ以外の6書については、エフェソの信徒への手紙は多くの部分がコロサイの信徒への手紙に依存している。そのコロサイの信徒への手紙には、宇宙的なキリスト論など、パウロの他の手紙に見られない要素が強い。テサロニケの信徒への手紙二は、手紙一と重複する部分が多く、また終末論が詳細に展開されている。テモテへの手紙一および二、テトスへの手紙のいわゆる牧会書簡には、すでに教会に教職制度が定着している様子がうかがわれ、執筆時代が降ると見られる。したがって本稿では、前記の7書を対象とする。

(2) これら7つの真正パウロ書簡もまた、しかし最初から今の形になっていたとは限らない。

1コリント書5:9には「わたしは以前手紙で、みだらな者と交際してはいけなと書きました」とある。パウロが1コリント書以前に書いた手紙があったことが知られる。しかしこれは失われ、現在には伝えられていない。

また2コリント書は、パウロがコリント教会に宛てて書いた少なくとも3つの手紙が複合して伝えられ、現在に至ったと考えられている。これらはいずれも第3回伝道旅行でパウロがエフェソに滞在している間に記されたと思われる。パウロは教会を指導するため、さまざまな機会を捕えて手紙を書いた。それらが合わさり、今日の2コリント書を形成しているとされる。

フィリピ書についても、パウロがエフェソ滞在中に獄中で記した部分(1-2章、4:10以下)と、後にコリントで記した部分(3章)が合わさって今日に伝えられていると考えられている。

(3) パウロの手紙は彼の信仰理解や神学を体系的に述べたものではない。むしろその時々状況に応じ、必要な事柄を強調して記している。1および2コリント書やフィレモン書はとくにその傾向が強い。一方、ローマ書では、未知のローマ教会に対して自らの信仰理解を比較的論理的に述べている。しかしこれもまた、パウロの世界伝道戦略を進める意図のもとに書かれている。

パウロは、自分の書いた手紙が教会で読まれることを予期していた。場合によっては、地域諸教会に手紙が回され、各教会で朗読されたと考えられる⁴⁾。その意味でパウロの手紙は純粋な私信とは異なる。むしろ教会に宛てた公的表明である。それゆえに個人的な状況や意見、好みなどを意識的に排除した可能性がある。

以上の特性を考慮して資料とすべきである。

(4) パウロの生涯については、略年表を表1に示した。これは、パウロの手紙と使徒言行録の記事などから推測したものである。根拠となる資料が十分ではないため、研究者によって相当異論もある⁵⁾。しかしパウロが手紙を執筆した時期について、大きな違いは見られない。表1によれば、第2回伝道旅行時、コリントで書いた1テサロニケ書がもっとも古い。多くは第3回伝道旅行中、

表1 パウロの生涯とその手紙略年表

主の年	事項	執筆した手紙
紀元前後	タルソで誕生	
33	ダマスコで回心・召命	
35-47	アンティオキアで異邦人伝道に従事	
47-48	第1回伝道旅行 言行録 13:4-14:28 キプロス島、小アジア中部	
48春	エルサレム会議 ガラ 2:1-10、言行録 15:1-35	
49春	アンティオキアでの衝突 ガラ 2:11-14	
49-52	第2回伝道旅行 言行録 15:36-18:22 小アジア中部、トロアス、フィリピ、テサロニケ、ベレア、アテネ、コリント、エフェソ	
50-52	コリントに滞在 言行録 18:1-11	テサロニケー
53-56	第3回伝道旅行 言行録 18:23-21:16 小アジア、エフェソ、マケドニア、アカイア	
53-55	エフェソ滞在 言行録 19:1-22	「前の手紙」(コリー 5:9) コリントー ガラテヤ
	エフェソで入獄	フィリピ 4:10-、1・2章 フィレモン
	コリント教会との関係悪化	コリントニ 1:3-11、2:14-6:13、7:2-4 彼の手紙(10:10)
	コリントへの中間訪問	コリントニ 10-13章「涙の手紙」(2:4)
55	マケドニアへ	
	コリント教会との関係好転	コリントニ 1:12-2:13、7:5-16、8-9章
55-56	コリントへ	ローマ 16章 フィリピ3章 ローマ
56春	献金を携えエルサレムへ 逮捕される	
56-58	カイサリアで入獄	
58秋-59夏	皇帝に上訴 ローマへ護送	
59?	殉教	

とくにエフェソで記されている。さらにその後コリントでもローマ書などを書いた。パウロの手紙は、5～6年という短い期間に集中して書かれた。したがって、これだけをもってパウロの考え方を全て知ることはできない。

2) 使徒言行録 使徒言行録は、一般に初代教会史として書かれたと言われる。その後半部分、13章以下にパウロの伝道活動が記されている。しかし使徒言行録は、パウロ没後30年以上たってから記された。そのために、しばしば、執筆者ルカ当時の教会の事情が反映されている⁶⁾。

また使徒言行録は、ルカ独特の救済史論的な視点から描かれている。ルカにとってキリスト教は、旧約以来の伝統を担うエルサレムで聖霊によって誕生した。この救いは使徒たちの働きにより、異邦人にまで伝えられ、ローマ帝国の首都ローマに

まで及ぶ。ルカにとってローマ帝国は、キリストの福音が伝えられるべき世界である。それゆえ、ローマに対するルカの見方は好意的である。一方、伝道の主体は、エルサレム教会を中心とする使徒たちである。その使徒とは、地上のイエスに出会って弟子となった人々であり、「主の復活の証人」⁷⁾である。その意味で、ルカにとってパウロは厳密な意味で使徒とは言えない。さらにその救済史論的な立場のゆえに、教会内の問題や衝突については言及しない傾向が見られる⁸⁾。

したがって使徒言行録は、パウロについて知る上では、二次的資料となる。しかしルカの視点を理解すれば、彼の記事から史実を推測することは可能である。本稿においても、必要に応じて使徒言行録の記事に触れることになる⁹⁾。

2. パウロは労働者だったのか

代々の教会は、パウロがテント造り職人であったと信じてきた。その根拠は使徒言行録 18:1-3 による。σκηνοποιός「テント造り」という語は、新約ではここだけに出る。パウロ自身は手紙で用いていない。これは事実だったのか。そもそもパウロは労働者だったのか。そうだとすると、彼は、イエス・キリストの福音を宣べ伝え、諸教会を立てる宣教の務めに全身全霊を投入していく。彼はいつまでテント造りの仕事を行ったのか。

1) パウロ自身の証言

(1) 1テサロニケ書 2:9

「兄弟たち、わたしたちの労苦と骨折りを覚えているでしょう。わたしたちは、だれにも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えたのでした。」

「働く」と訳されている語 ἐργάζομαι は新約で 41 回使われ、「働く、仕事をする」、「行う」などとされている。新共同訳聖書では半数以上の 23 回が「働く、仕事をする」と訳される。その多くが職業的労働を意味する。彼自身の叙述によれば、パウロは第 2 回伝道旅行でテサロニケに滞在している間、労働に従事した。

また、νυκτὸς καὶ ἡμέρας「夜も昼も」とある。これは何を意味するのか。夜も昼も働いたということか。夜ないし昼だけ働き、昼ないし夜には宣教に従事したのか。夜、働いて昼伝道したり、その逆であったり、様々な場合があったのか。しかし「夜も昼も」は新約では慣用的に他にも多く用いられている¹⁰⁾。その逆の表現「昼も夜も」ἡμέρας καὶ νυκτὸς もまた、多く見られる¹¹⁾。ゲーガンはここを根拠に、パウロがテサロニケで夕方か夜に働き始め、午後から夕方に会堂で宣教したとする¹²⁾。しかし「夜も昼も」という表現は慣用的な表現である。またパウロのテサロニケ滞在はそれほど長期には渡らなかつたと思われる¹³⁾。さらに当該箇所趣旨は、パウロがテサロニケの人々に経済的負担をかけずに福音を宣べ伝えたことにある。その点では「夜働いたり昼働いたりする、昼間でも夜間でも働く、という意」¹⁴⁾とするのが妥当だろう。しかしパウロが自らの労働によって完全に自活したわけではない。諸教会の支援があった（フィリピ 4:16）。

援助を受けながら仕事をし、宣教に当たったと考えられる。

パウロは第 2 回伝道旅行で初めてテサロニケを訪問した時、自ら労働しながら福音を宣べ伝え、教会を立てるに至った。

(2) コリントの信徒への手紙一 4:12

パウロは、「苦勞して自分の手で稼いでいます」と語る。「苦勞して稼いでいる」は、κοπιᾶω「働く」に、前出の ἐργάζομαι「働く、仕事をする」の分詞が重ねられた形である。κοπιᾶω は新約で 23 回使用され、「疲れた」（マタイ 11:28、ヨハネ 4:6）と訳される場合もあるが、多くは「苦勞する」（ガラテヤ 4:11）、「苦勞する」（ヨハネ 4:38）、「働く」（言行録 20:35、1 コリ 15:10 など）と訳される。二つの語を重ね、パウロが労働に従事したことを強調している。

1 および 2 コリント書の背景には、パウロとコリント教会との微妙な関係がある。この教会はパウロの第 2 回伝道旅行で生まれた。しかし彼が去ると、他の伝道者たちが入ってきて彼を批判した。批判の中心は、パウロが復活の主イエスと出会っておらず、使徒ではないという点にある。こうした批判がパウロの伝えた福音を歪め、教会が福音から逸脱する危険を生んだ。パウロは何度も手紙を書き、教会を福音に立ち戻らせようとするが、教会の反応は鈍かった。そこで彼はコリント教会が「大金持ち」、「王様」（1 コリ 4:8）になっていると指摘し、それに対して自身の姿を対照的に「苦勞して自分の手で稼いでいる」と提示することによって、教会が悔い改め、福音に戻るよう促した¹⁵⁾。そのためここでは、彼が労働に従事したことを強調する気配が見られる。しかしパウロ自身がまったく仕事をしていなかったなら、このように労働を強調することもできなかつただろう。したがってパウロは 1 コリント書を執筆した当時、つまり第 2 回伝道旅行でエフェソに滞在していた時も、職業労働を続けていたと思われる。

2) その他の証言

(1) 使徒言行録 18:1-3

パウロ自身の文章によって、彼が職業労働に従事したことが予想される。しかしその職種が何であったかには触れられていない。一方、使徒言行録 18:3 には「その職業はテント造りであった」

と記されている。「テント造り」σκηνοποιόςは新約でここにだけ出る。テント造りの材料には、山羊の皮もしくはその毛を織った「キリキア布」が使用された¹⁶⁾。そのため、σκηνοποιόςとは、皮製品を扱う「皮なめし」、「皮革業」あるいは「皮細工人」であったと思われる¹⁷⁾。

パウロがこのσκηνοποιόςであったであった可能性がある。彼の出身地タルソスはキリキア州の州都であり、農産物の加工業が盛んに行われた。亜麻布やリンネル織を産した。とくに山羊の毛織物は特産品であり、キリキア布としてその丈夫さが評価され、テント造りに使用された。当時、ユダヤ教のラビは、聖書を民衆に教える際、報酬を得ることは禁じられていた¹⁸⁾。そこでパウロはこの仕事に従事したと考えられる。

ただし使徒言行録はパウロがコリントでこの職業に従事したと報告するに留まる。パウロによれば、彼は第2回伝道旅行でテサロニケにいた時、すでに労働をしている。使徒言行録はそれに触れない。そこでは3回の安息日にわたって伝道したとされ、パウロの滞在はわずか3週間とされている。そのような短期間に仕事をするのができたのだろうか。1テサロニケ書2:9に従えば、パウロがもう少し長く滞在し、働いた可能性がある。

(2) 1コリント書9:3-18

この前の箇所ではパウロは、自分が使徒であると主張している(1-2節)。したがって自分もまた、エルサレム教会のヤコブやペトロのように、教会から報酬を受ける資格があると語る(3-12a、14節)。その上で「しかしわたしたちはこの権利を用いませんでした。かえってキリストの福音を少しでも妨げてはならないと、すべてを耐え忍んでいます」(12節b。15節も同様)と述べる。

パウロによれば、彼はコリントに滞在していた時も、そしてエフェソにいる現在も、コリント教会から経済的支援を受けていない。つまりコリントでも¹⁹⁾、あるいは多分エフェソでも²⁰⁾、自ら働きながら宣教にあたった。しかしだからといって彼が自分の労働で全生活費をまかなったとは言えない。フィリピ教会など、マケドニアの諸教会から援助を受けていたと思われる²¹⁾。

(3) 2コリント書11:7-11

「それとも、あなたがたを高めるため、自分を

低くして神の福音を無報酬で告げ知らせたからといって、わたしは罪を犯したことになるでしょうか」(7節)。パウロはここでも、かつてコリントに滞在した時、コリント教会から生活の支援を受けずに伝道したと語っている(9節aも同様)。

但しこの筆致は、コリントで自ら働いたことを感じさせない。むしろ「わたしは、他の諸教会からかすめとるようにしてまでも、あなたがたに奉仕するための生活費を手に入れました」(8節)、また「マケドニア州から来た兄弟たちが、わたしの必要を満たしてくれた」(9節)と語っている。ここでは、マケドニア州、フィリピやテサロニケなどの諸教会が生活費を送り、パウロのコリント伝道を支えていたことを伝える。パウロがコリントで労働したことには触れていない。

しかしそれは、パウロがコリントで仕事をしなかったことを意味しない。この文脈では、パウロを使徒と信じその伝道に協力して支えたマケドニア諸教会の姿勢と、パウロを使徒と認めない一部指導者に惑わされ「異なったイエス」や「違った霊」(4節)に惹かれているコリント教会の現状とを対比することによって、コリント教会が本来の信仰に立ち戻ることを強く訴えている。そのため、パウロがコリントで職業労働に従事したことに触れていないと考えられる。

3) 結び

以上から、次の点を確認することができる。

(1) パウロ自身の言葉と使徒言行録の記録から、パウロは第2回伝道旅行でテサロニケとコリントに滞在していた時、職業労働に従事した。またエフェソに移ってから、働いた可能性がある。使徒言行録18:18以下によれば、同業者のアクラとプリスキラ夫妻もエフェソへ同道している。また1コリント書4:12は、この手紙を執筆中にも労働を続けていたことをうかがわせる。

(2) パウロがσκηνοποιός「テント造り」ないし「皮細工人」であった可能性がある。唯一の根拠は使徒言行録18:3であるが、パウロはこれを否定していない。また彼の出身地タルソスで、キリキア布を用いたテント造りが盛んに行われていたことから、この可能性は高い。

(3) パウロがいつまで職業労働に従事していたかは、明らかではない。広く宣教活動を行うため

には、日常的に働き続けるのは困難だっただろう。しかし少なくとも第2回伝道旅行でテサロニケやコリントに滞在した時には、彼は仕事をしたし、エフェソでも働いた可能性が認められる。

3. パウロの職業理解

パウロの手紙には、彼が世俗の職業労働をどう捉えていたか、系統的に示す論述は見られない。わずかに1テサロニケ書に、職業についての勧告が見られる。ここでは、その幾つかの箇所を検討し、また世俗社会について彼がどのような立場を取っていたかを確認して、彼の職業理解を探る。

1) 1テサロニケ書4:11

「そして、わたしたちが命じておいたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい」(新共同訳)。これは、パウロが職業労働について明確に述べた、ほぼ唯一の勧告である。

「努めなさい」とある *φιλοτιμείσθαι* は、「～を名誉とする」*φιλοτιμέομαι* の現在形不定詞である。これ以下、3つの不定詞形の動詞で語られる内容が、当時の社会のなかでキリスト者が取るべき「品位ある」(12節) 生き方とされる。背景には、当時のテサロニケ教会のキリスト者たちが、「穏やかならざる生活をし、他人のことにばかり気を使い、仕事、少なくとも手仕事を怠る傾向があった」²²⁾。その「生活の仕方は恥知らずで、異教徒の目にもぶざまで、他人の援助を必要とする」²³⁾ とパウロは見ている。

(1) 「穏やかにしている」*ἡσυχάζω* は、たんに落ち着いた生活をするというだけではない。テサロニケ教会の人々は、一種の宗教的興奮状態にあった。集中力に欠け、日常生活を維持することができない。そこでパウロは、穏やかに社会人としての責任を果たして生きることを勧める。

(2) 「自分自身のことをする」*πράσσειν τὰ ἴδια* ここで考えられるのは、①他人のことに口出ししないで自分のことを考え、自分で処理するということか、さらに進んで②自分の仕事に精を出すという意味である²³⁾。②と解し、「自分の仕事に励み」²⁴⁾と訳しうる。但しここでの中心は、他人に余計な口出しをせず、まず自分の務めを果たすことに集中するということにある。

(3) *ἐργάζεσθαι ταῖς χερσὶν ὑμῶν* 「自分の手で働く」ギリシア社会には労働を蔑む傾向があった。テサロニケも同様だったかもしれない。それに対してパウロは旧約以来の伝統に従い、労働を重んじる。彼自身が労働に従事したように、テサロニケ教会の人々もまた自ら手を働かせて労働し、収入を得て生活するよう勧める。

こうした(1)～(3)の生き方こそが、キリスト者が「名誉とする」*φιλοτιμέομαι* べき生活である。日常生活を離れ、宗教的熱狂状態を誇るのではない。むしろ穏やかに生き、自分の務めを果たし、日常の職業労働に精を出すことが、キリスト者として名誉ある生き方であるとする。

(2) 1テサロニケ書4:6

「このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしてはいけません。」(新共同訳)

「このようなこと」*πρᾶγμα* は、①このこと、②もめごと・訴訟、③取引・仕事などと訳される。新共同訳は①を採り、3-4節で言及された性的不道徳を指すとする。しかし3節で、異教徒が陥っている性的不道徳をキリスト者が行わないようにと勧めた後で、それが信者同士で相手を出し抜き、利益を上げることになるというのは、意味が通じにくい。また関連動詞 *πλεονεκτέω* 「私腹を肥やす、ふっかけて儲ける」は性的問題よりも経済的問題を予想させる。*πρᾶγμα* は「取引、仕事」と理解する方が自然である²⁵⁾。パウロは4:1-8で、性的不道徳を戒めるとともに物質的な欲望をも戒めている。その関連から11節で勤労が勧められると考えれば、文脈がつながる²⁶⁾。

このようにパウロは日常の職業的労働を、信仰生活の重要な要素と見ている。仕事に従事する上でも、兄弟に対して誠実であることが、キリスト者の信仰の証しとなる。

3) 1テサロニケ書5:14

「兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠けている者たちを戒めなさい。気落ちしている者たちを励まなさい。弱い者たちを助けなさい。すべての人に対して忍耐強く接しなさい」(新共同訳)。

「怠けている者」と訳されている *ἄτακτος* は、口語訳でも「怠惰な者」となっている。労働を忌避し、怠る信者への勤労の勧めと理解している。一方、新改訳は「気ままな者」としている。

ἀτακτος は元来「隊列を離れた兵士、落伍者」を意味する。守るべき秩序から逸脱した者であり、それゆえ「きちんとしていない人」²⁷⁾、「無秩序な者」²⁸⁾と訳される。パウロがこの語によって仕事に関する事柄を扱っているとしても、それは単純な怠惰を問題にしているのではない。むしろ仕事に必要な決まりを守らず、そこから逸脱している状態を問題にしている。「キリスト信仰を受け容れたことから、ある新しい体験に圧倒されて、内的興奮状態に入り、それまでの生活の秩序をはなれ、生活の資を得る仕事に専念する代わりに行動主義的な節度のなさに陥った人々を指す」²⁹⁾。

これに対するパウロの要求はごく常識的である。教会に秩序を求める。他の2者、すなわち「小心な人」、「弱い人」を含め、テサロニケ教会の人たちに本来の生活に戻るよう勧める。そのために教会が適切な指導を行うよう求めている。

1テサロニケ書の背景には、切迫した終末に対する人々の誤解がある。彼らはパウロを通してイエス・キリストの福音を受け入れた。しかしキリストの再臨と終末の時が迫っているという緊張感から、一種の宗教的興奮状態に陥った。日常生活を放棄し、職業労働から離れる者たちが現れる。パウロはこれに警告を与え、静かにして、秩序ある生活を取り戻し、それに励むよう勧めた。

1テサロニケ書は、パウロの手紙の中でもっとも初期に記された。当時、パウロを含め、キリスト者たちはキリストの再臨の時が近いと感じていた。したがってその手紙においては、主の再臨についての教えが述べられている³⁰⁾。しかしそこでもパウロは日常生活の秩序を重んじる。霊的興奮状態を避けるよう警告する。直接、職業労働の意義を説き、強調しているわけではない。しかし生活の秩序を重んじる彼の勧告には、職業労働に励むことも当然、含まれている。

4) ローマの信徒への手紙 13:1-7

パウロは、初期の手紙以来、一貫して日常生活の秩序を重んじている。この姿勢は、終末の遅延が課題となった後期の手紙では、より強く現れる。その典型を、ローマ書13章に見る。

ここではまず「人は皆、上に立つ権威に従うべきです」と述べる(1節)。キリスト者が世俗の権威に従うよう指示する。この言葉は教会の歴史

の中で誤解を招いた。世俗の権力を無批判に神的権威とみなし、王権神授説など権力の神学的根拠とする思想も現れた。とくに国教会ないしそれに近い形で教会が国家権力と一体となり、その支配を信仰の面から正当化してきた歴史がある。

しかしパウロは神学的国家論を展開してはいない。ここでの「権威」は、地方都市におけるローマ官憲を指す。「権威に逆らう者は、神の定めに従うことになり、背く者は自分の身に裁きを招く」(2節)とある。この裁きとは、終末における神の裁きではない。世俗法に違反し、官憲に逮捕・拘束されて裁判に服することを指している。

当時、さまざまな宗教的熱狂主義がローマ帝国への反感を煽り、ローマによる鎮圧を招いた。パウロは、世の終わりが到来するとしても、今はこの世の秩序に従うべきだと考えていた。それゆえ彼はローマ世界の異邦人への伝道を自分の使徒としての使命と受けとめ、ローマ帝国西端の地イスパニアまで伝道を志した³¹⁾。徒に終末的熱狂に走り、ローマへの反乱を試みることは、伝道の可能性を消し去る暴挙と見た。そこで、秩序ある日常生活を守ることを諸教会に勧めた。職業労働に励み、自らの手で生活を支えつつ、ローマへの納税義務を果たすことを求めた(7節)。

パウロの手紙の中で後期に属するローマ書にも、再臨の希望は依然として強い(13:11)。しかしここでは、終末の遅延という事態を受け入れており、1テサロニケ書のような、再臨の切迫した緊張感は薄れている。むしろ「夜は更け、日は近づいている」(12節)からこそ、「日中を歩むように、品位をもって歩もう」(13節)と勧める。「救いは近づいている」(11節)。この終末論的な認識が、日常生活を整えることを求める。その中には日常的な職業労働に従事することも含まれる。

4. 「召し」と職業

1) 問題の所在 パウロの職業理解を知る上で、1コリント書7:17-24の検討は欠かせない。この箇所への翻訳が職業観の変遷に画期的な転機をもたらしたとされる。M. ルターは、それまでの教会公用のラテン語聖書ウルガタに代わり、ドイツ民衆が聖書を読み、その言葉に従うよう願って旧約聖書をドイツ語に翻訳した。これが1534年の

ルター訳聖書である。そこでは、ルターは、「召し」を意味する κλησις を Beruf「職業」と訳した。7:20 は「それぞれに与えられた職業 Beruf に留まっていなさい」となっている。

ルター訳聖書はドイツ語圏に普及し、大きな影響を与えた。M. ヴェーバーによれば、これによって職業観は大きく変化した。職業労働が神の召命であるとされ、熱心なプロテスタントは、自分の職業を神の召しに基づく天職として労働に励んだ。これは、世俗の職業を教会の聖職より下位に置き、労働は貪欲を生む危険があるとして警戒した中世の職業観とは大きく異なる。聖書の翻訳が職業観を革新する契機となったと言う³²⁾。

しかしここでパウロはそのような職業理解を語っているのだろうか。その本来の意味を釈義的に確認しておく必要がある。

2) 文脈 前後の文脈は比較的明瞭である。キリストの再臨を間近に感じていたパウロは、今、もっとも重要なのは終末に備えることだと認識していた。そのために、現在の状況、境遇、身分を変えようとする動きに対して消極的である。

7:1-16 は結婚についての勧告である。未婚の男女に対し、独身を保つよう勧める(1, 8節)。しかし異性への思いが強ければ結婚は許される(2, 9節)。結婚、つまり未婚状態の変更に対して、消極的賛成の立場を取る。既婚者に対しては、純粋な信仰を深めるためという理由であっても、離婚を思いとどまらせようとする(10-14節)。

7:25-40 も同様である。「今危機が迫っている状態にあるので、…人は現状にとどまっているのがよいのです」(26節)。未婚の者たちにも、やもめに対しても、「現状に留まれ」と言う。

この指示は、終末の時が近いという認識から出ている。「今危機が迫っている」(26節)、「定められた時は迫っています」(24節)と繰り返す。現在の状況を変えることに注意と努力を費やすよりも、迫り来る主の再臨に集中して備えるべきだというのが、ここでの趣旨である。

3) 7:17-24 ここでも前後の文脈と同様、パウロの趣旨は変わらない。「おのおの主から分け与えられた分に応じ、それぞれ神に召されたときの身分のままで歩みなさい」(17節)と言う。「召す」καλέωは、新約で147回使われている。そ

のおもな意味は、①「呼ぶ」(ルカ 1:60、言行録 14:12)、②「名付ける」(ルカ 1:60、言行録 1:19)、③「(人が)呼ぶ、招く」(マタイ 22:3、1 コリ 10:27)、④「(神が)呼ぶ、招く」(1 テサ 4:7、エフェソ 4:4)である。ここではκαλέωが8回使われ、その全ては④「(神が)招く」の意味で用いられる。神が人を招き、使命を果たすようにと召し出すこと、つまり召命を意味する。20節の名詞形の κλησις もまた、召命を指す。

ここでの召命は具体的に何を意味するのか。当該箇所では、καλέωが不定過去形と完了形で使われる。18、20、21、24節ではそれぞれ1回、22節では2回、不定過去形で出る。過去において神が一回的、決定的に人を呼び出し、招いた。それは、コリント教会の人々が神に招かれて洗礼を受けたことを指す。他方、καλέωは17、18節では完了形で出る。神の招きは過去に起こり、現在も継続している。人々が今も教会に結ばれ、キリスト者として生きていることを表す。神はかつて人々を招き、洗礼に与らせた。その決定的な瞬間から、コリント教会の人々は教会に連なり、キリスト者として召された状態が継続している。それがここでの「召し」の内容である。

したがってこの「召し」は、職業労働を直接意味するものではない。むしろ、神に招かれ、洗礼を受けて教会に結ばれたこと、さらに今もその状態が続いていることを示す。

ヴェントラントは次のように記している³³⁾。

「原始教会とパウロの用法では、『召し』とはつねに福音による神の召しであり、それによってわたしは教会の成員となるべく、また神の支配する救いを受けるべく定められているのである。それゆえわれわれは、宗教改革者の『職業』観 - それは神の召しを、この世のために定められた神的秩序の内部における『身分』、『職務』と見なす - をこの20節から導入すべきではない。」

パウロは、神の召しを受けてキリスト者となった時の状態に留まるよう勧める。その具体的な事例として、割礼と身分の問題を取り上げる。

(1) 割礼 18-19節 割礼はユダヤ教男性信者であることの顕著な徴である。しかしパウロは、割礼のない異邦人がキリストを信じてキリスト者となるために割礼を受ける必要はないと強く主張

した³⁴⁾。同時に、離散（ディアスポラ）のユダヤ人が国際人と認められるため、手術を受けて割礼の跡を消そうとすることにも反対した³⁵⁾。割礼問題についてもパウロは、神に召され、洗礼を受けた時の状態を変えないよう、勧めている。

(2) 奴隷か自由人か 21-23節 $\chi\rho\eta\sigma\alpha\iota$ (21節) は不定過去命令形であり、「利用せよ」と訳される³⁶⁾。問題は、その目的語となる部分がないことにある。目的語を、①「自由になること」と取れば、ここの訳は「自由の身になることができるなら、自由を利用せよ（自由になれ）」³⁴⁾となる。他方、②「奴隷であること」と取れば、「自由の身になることができるとしても、むしろそのままい（ることを利用し）なさい」³⁸⁾となる。20節でも、また前後の文脈でも、パウロは召された時の状態に留まるよう勧めている。ここに限り、身分を変え、自由の身になるようにと語るの是不自然である。また $\epsilon\acute{\iota}\ \kappa\alpha\iota$ 「たとえ～であっても」は逆接の語であり、「もし自由の身になることができるなら」と順接に訳すには無理がある。これにはさらに $\mu\acute{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu$ 「むしろ」が応じている。「たとえ自由になれるとしても、むしろ」には、「奴隷のままに留まりなさい」、「奴隷であることを利用せよ」と続くのが自然である。

ただしこの箇所をもって直ちにパウロを奴隷制支持者と見なすのは早計だろう。彼の視線は、間近なキリストの再臨にある。その終末的緊張状態のなかであって、「おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい」(20節)と語っている。

以上から、当該箇所における $\kappa\alpha\lambda\acute{\epsilon}\omega$ および $\kappa\lambda\eta\sigma\iota\varsigma$ が、世俗の職業を指すとは言えない。職業が神から与えられた召命であり、天職であるとする理解を、ここから導き出すことはできない。その意味では、ルターが20節の $\kappa\lambda\eta\sigma\iota\varsigma$ を *Beruf* 「職業」と訳したことは勇み足であり、誤訳とも言える。パウロが求めたのは、コリント教会のキリスト者たちが終末に備え、信仰と生活を整えることである。そのために、各自のこの世における身分や立場、生活を絶対化せず、むしろそれらについては神に召された時の状態を変えないよう、勧めている。したがってルターが主張したように、パウロは神から与えられた職業を変更してはならないと語っていると見ることは妥当では

ない。

5. パウロにおける職業の位置

1) パウロの主要関心事

パウロの手紙の中に、職業について直接言及した部分は少ない。明確に勤労を勧めているのは、1テサロニケ書4:11のただ1箇所だけである。同5:14は、直ちに勤労の奨励とは受け取ることができない。ルターが *Beruf* と訳した1コリント書7:20の「召し」についても、これを職業ないし天職と理解するのは無理がある。しかしパウロが世俗の職業労働を否定的にとらえた発言もまた見られない。彼自身、ユダヤ教ラビとして手仕事を身に着けていた。また伝道旅行の間にも、少なくともテサロニケとコリントでは、宣教の傍ら労働に従事した。エフェソに移ってから仕事もしていた可能性がある。にもかかわらず職業労働について多くを語っていないのはなぜか。

(1) パウロは自分を、異邦人にイエス・キリストの福音を宣べ伝え、教会を立てるために召された使徒であると自覚していた³⁹⁾。彼の関心の中心は、イエス・キリストの十字架と復活の福音を世界中に伝えることにあった。伝道により各地に教会を建設し、諸教会が福音に正しく立ち続ける。そのために全精力を注いだ。コリント教会に多くの手紙を書いたのも、ガラテヤ教会に、怒りや悲しみまで露わにしながら手紙を書いたのも、この使命を果たすためであった。福音伝道の業が中心の関心であり、それに比べるならば、キリスト者が職業労働に励むよう勧めることは、彼の関心の周辺に位置していた。

(2) またパウロは、キリストの再臨が間近に迫っていると認識していた。そのため、キリスト者の細かな日常生活に立ち入るよりも、終末の時に備える信仰の姿勢を強調した。終わりの時が近いという意識は、彼のどの手紙にも現れている⁴⁰⁾。

終末的緊張のなかでパウロが人々に示したのは、イエス・キリストの復活の福音だった⁴¹⁾。「イエス・キリストが（死んで）甦ったので、それ故われわれも復活の現実にあずかるであろう」⁴²⁾。これが、終末理解を巡り混乱していた異邦人諸教会に向けて第一に語るべき福音の内容だった。

(3) 一方でキリストの来臨は、当初期待したよ

うに直ちには起こらなかった。そのため初代教会のなかで混乱が生じた。しかしパウロはこの事態を、自分が広くローマ世界全体に福音を述べ伝えるために神から与えられたものだと理解した。

予期していた以上の時間が与えられた。それを用いて「わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります」（ローマ1:14）⁴³⁾。パウロはこの使命を果たすために帝都ローマを訪ね、ローマ教会の支援を受けて（1:10）、さらに帝国西端の地イスパニアにまで伝道旅行を行う構想を立てた。「しかし今は、もうこの地方に働く場所がなく、その上、何年も前からあなたがたのところに行きたいと切望していたので、イスパニアに行くとき、訪ねたいと思います。途中であなたがたに会い、まず、しばらくの間でも、あなたがたと共にいる喜びを味わってから、イスパニアへ向けて送り出してもらいたいのです」（ローマ15:23-24）と述べている。この壮大な伝道戦略の第一歩が、未知のローマ教会に対して自分を使徒として紹介することだった。こうしてローマ書は記されるに至る。

パウロの最大の関心事は、人々がイエス・キリストの福音を知り、救いに与ることだった。そのための時間は、多くはない。何よりも重要なのは、伝道の推進と教会の指導だった。そのため、職業観を含むキリスト者の日常生活には、必要以上に細かく立ち入ることはしなかったと考えられる。

2) 終末観と日常生活

パウロには多くの時間が残されていなかった。終末的緊張のもとで彼は福音の前進のために全精力を注いだ。そのために日常の職業労働の重要性について多く語ることはしなかった。しかし職業労働を軽視していない。むしろキリスト者が、勤労を含む日常生活を整えるよう勧める。仕事に励み、自分の手で働いて静穏な生活をするを名誉とすべきである（1テサ4:11）。仕事の上で教会の兄弟を踏みつけたり欺いたりしてはならない（1テサ4:6）。職業に伴う規律を守り、きちんとした生活を作り上げるよう、教会は信者を指導すべきである（1テサ5:14）。そのために彼自身、伝道しつつ労働する姿を、テサロニケでも（1テサ2:9）、コリントでも（言行録18:1-3）、そして恐らくエフェソでも（1コリ5:12、言行録20:33

-35）、模範として示した。パウロにとって職業労働に携わることは、キリスト者としての証しであった。

しかしキリストの再臨を間近に感じ取り、なおその上で日々の労働に励むことは、どのようにして可能となったのか。

1テサロニケ書の背景には、キリストの再臨に対する教会の人々の誤解がある。「キリストの再臨がすぐに起こるといった誤った仮定に基づいて行動したため、多くの人々が農場や作業台を離れ、仕事を止めてしまった」⁴⁴⁾。終末が近いという意識から、人々が一種の宗教的興奮状態に陥り、他者に口出しし、仕事に身を入れず、世の規律を無視する事態が生じた。ゲーガンは、この状態が、労働を専ら奴隷が行う卑しいものと見るヘレニズム的文化から生まれたと見る。「まさにこの見解を訂正し、これを吸い込んでいた精神を破ろうとして、聖パウロは、労働は現在の秩序に伴う義務だと活発に主張した」⁴⁵⁾。

パウロはさまざまな箇所、終末に対する人々の誤解を正そうと試みている。

(1) テサロニケ教会に対しては、「実に、神の御心は、あなたがたが聖なる者となることです」（1テサ4:3）と述べている。具体的には、①妻との正しい夫婦関係を保ち（3b-5節）、②聖なる生活をし（7節）、③兄弟愛に励み（9-10節）、④他人に頼らず職業労働に励んで自活し、⑤社会人としての穏やかな生活を名誉とする（11-12節）よう強く勧める。その上で終末の希望を語る（4:13-5:11）。また⑥規律ある生活をするよう求める（5:14）。パウロは、主の来臨に備えるためには、日常生活を整えることが重要だと考える。

(2) コリント教会に対しても同様である。1コリント書5章では、性的不道徳に陥ったキリスト者が教会の中にいることを嘆いている（1コリ5:1）。6章では、教会員同士の訴訟問題（1-11節）や、買春問題（12-18節）を取り上げる。こうした事態が、コリントの異邦人社会に浸透していた倫理的混乱が教会の中に持ちこまれた結果なのか、あるいは終末の接近に対する誤解から生じたのかは不明である。しかしパウロはそれに対して、終末における神の裁きを語り（5:13）、終わりの時に神の国を受け継ぐ希望を語る（6:9-16）こと

によって、さまざまな不道德を正そうとする。終末的緊張が現在の生活における秩序を求める。

(3) ガラテヤ教会に対しては、ガラテヤ書 5:2 以下で、キリストによって与えられた自由に言及する。その自由を隣人愛のために用いるよう勧める (5:13)。こうした教会における隣人愛の勧めは、キリストの十字架の出来事と聖霊の働きから導き出される (24-25 節) とともに、終末への意識によって根拠づけられる。「今、時のある間に、すべての人々に対して、特に信仰によって家族となった人々に対して、善を行いましょ」(6:10)。終わりの時が迫っている。だからこそ今、隣人愛に生きることが求められている。

(4) ローマ教会に対しては、「いまや、わたしたちが信仰に入ったところよりも、救いは近づいている」(ローマ 13:11) と語る。終末の遅延が課題であったパウロ後期の手紙でも、終末への意識は保持されている。この意識が、キリスト者の生活を律する原動力となる。「夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょ。日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか」(13:12-13) と勧める。

パウロにとって再臨の時の切迫は、異様な宗教的興奮にはつながらない。むしろ主の到来が近いからこそ、いつ主を迎えてもよいように絶えず日常生活を整えることに励む。その中に、職業労働に携わることも含まれる。労働を重んじることは、福音への応答の必然的な帰結なのである。

おわりに

1) パウロは職業労働を絶対視してはいない。その眼差しは常に、福音の核心に注がれている。その核心は、イエス・キリストの十字架の死と復活が罪と死に対する勝利であること、信仰によって神の義を与えられ、罪の赦しと復活の命にあずかること、終わりの時、再臨によって主の完全な勝利がもたらされることである。教会はこの福音によって立てられたキリストの復活の体である。パウロはこのように信じ、教会が福音に正しく立ち続けるよう勧めた。

2) イエスにおいてこの福音がもたらされた。キリスト者は教会に召され、その救いにあずかっている。完全な救いが訪れる時が近い。キリスト

者は、この恵みに応えて生きる。日常生活を整え、主の来臨に備える。そのなかに、労働する生活が含まれる。勤労が福音の中心ではない。それは、福音がもたらす結果なのである。

3) 今日、職業に就き、労働に励むことの意味が曖昧になっている。勤労が、たんに生活のため、家族を養い育てるため、富を得て豊かな生活をするため、高い社会的地位を得るため、といった自己実現の手段としてのみ意識されることが多い。しかしそのために、希望した職業に就くことができずに勤労意欲を失ったり、職場の人間関係や給与の問題に躓き離職したりする場合が少なくな。就職のための資格取得や情報、就職活動の技術だけではなく、何よりも、働く意味と意欲を与える内面的な動機が重要である。とくに、自分のためだけではなく、自己の外にある存在のために生き、働くことの豊かさを知ることが求められる。その意味で、パウロが福音の核心を見つめ、終わりの時の完全な勝利を確信して、それに応える重要な一つの道として職業労働を捉えたことは、多くの示唆に富むと考える。

<注>

- 1 Weber, Max *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus* 1919 梶山力・大塚久雄訳 1955 年
- 2 楠本史郎「旧約の労働観 **לֵבָב** をめぐって」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第 2 号第 2 分冊 2009 年 1 頁以下
- 3 楠本史郎「福音書の労働観」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第 3 号 2011 年 131 頁以下
- 4 コロサイの信徒への手紙 4:16 を参照
- 5 例えば、佐竹明は、エルサレム会議は第 1 回伝道旅行の前に行われたと考えている。『使徒パウロ 伝道にかけた生涯』1981 年 43 頁
- 6 例えば「長老」という記述が見られる (20:17)。パウロ時代には、教職制度は確立されておらず、長老という職位は確定されていなかった。これはルカの時代における教会の事情が反映していると考えられる。
- 7 使徒言行録 1:22
- 8 例えば、アンティオキア教会で異邦人との食事を巡ってパウロがペトロと対立したこと (ガラテヤ 2:11-14) は使徒言行録に記されていない。また、エルサレム会議で異邦人教会がエルサレム教会のために献金をして支えるよう取り決められたこと (ガラテヤ 2:10。使徒言行録 15:23-24 と比較) も、使徒言行録には報告されていない。
- 9 Geoghegan, Arthur は、*The Attitude Towards Labor In*

- Early Christianity And Ancient Culture* 1943 の第2部第3章「使徒たちと労働」(p.105-121)において、パウロの労働観を論じている。そこでは2テサロニケ書や使徒言行録をも一次資料として扱っている。しかしパウロ真性の手紙7書に対して、それ以外の手紙6書および使徒言行録は、区別して用いる必要がある。
- 10 マルコ 4:27、5:5、ルカ 2:37、言行録 20:31、26:7、テサー 3:10、テサニ 3:8、テモ一 5:5、テモニ 1:3 など
- 11 ルカ 18:7、言行録 9:24、黙示 14:8 など
- 12 Geoghegan, Arthur *ibid.* pp.109
- 13 言行録 17:2 には、「パウロは…三回の安息日にわたって聖書を引用して論じ合い」とある。
- 14 岩隈直訳註『脚註付き希和对訳新約聖書 6』1977年 16頁
- 15 これに関連して田川建三は次のように述べている(『新約聖書 訳と註 3』2007年 260頁)。「パウロさんがお金持のご子息であることが問はず語りににじみ出ている。…宣教師として活動するために時たま働いて自分の生活費を稼いだことを、何かひどく特別に立派なことのように自慢して、信者たちに恩を着せたがる」。しかしパウロの意図は、コリント教会が福音に復帰することにあり、自身の労働経験を強調することにあつたのではない。
- 16 Stählin, Gustav *Das Neue Testament Deutsch: Die Apostelgeschichte* 1968 大友陽子・秀村欣二・渡辺陽太郎訳 1977年 489頁
- 17 Bruce, F.F. *The Book of The Acts* 1958 聖書図書刊行会訳 1958年 397頁
- 18 ブルースは、ラビ・ガマリエル三世と、ラビ・ザドクの言葉を引用し、パウロの当時、律法の言葉を教えて自身の利得を得るラビは、自ら滅びの道を進むことになる」と説明している。Bruce, F.F. 前掲書 397頁
- 19 使徒言行録 18:1-3 を参照
- 20 使徒言行録 20:33-35 においてパウロはエフェソ教会の長老たちに、自身が、イエスの言葉に従い、生活のためだけではなく、教会の人々を助けるために労働したとしている。パウロがエフェソでも労働に従事していたことは、1コリント 4:11-12 にうかがわれる。
- 21 フィリピ 4:15
- 22 Holtz, Traugott *Evangelisch-Katholischer Kommentar zum Neuen Testament : Der Erste Brief an die Thessalonicher* 1990 大友陽子訳 1995年 190頁
- 23 岩隈直、前掲書 31頁
- 24 新共同訳
- 25 岩隈直、前掲書 29頁
- 26 田川、前掲書 125頁
- 27 Holtz, Traugott 前掲書 268頁
- 28 田川、前掲書 137頁
- 29 Holtz, Traugott 前掲書 268頁
- 30 1テサ 4:13-5:11。他にも1コリ 15:12-58、フィリピ 3:20、4:5 など。
- 31 ローマ 1:10-15、15:22-24、28-29。なお使徒言行録 19:21、23:11 も参照。
- 32 Weber, Max 前掲書上 95-130頁
- 33 Wendland, Heintz-Dietrich *Das Neue Testament Deutsch : Die Brief an Die Korinther* 1968 塩谷饒・泉治典訳 1974年 125頁
- 34 ガラテヤ 5:6、6:12-16。2:3-10 も参照。ここでパウロは、エルサレム会議において、異邦人は割礼なしにキリスト者となることが認められ、合意された」と語っている。
- 35 Wendland 前掲書 124頁
- 36 岩隈直『希和对訳・脚註つき 新約聖書 7』1980年 55頁
- 37 口語訳、フランシスコ会訳、新改訳など
- 38 新共同訳、岩隈訳など
- 39 ローマ 1:1-6
- 40 フィリピ書では、「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています」(3:20)と記し、また「主はすぐ近くにおられます」(4:5b)と書いている。
- ローマ書では「更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです」(13:11)と述べる。
- これら後期の手紙でも、終末は意識されている。この傾向は初期の手紙に一層強く現れる。
- 1テサロニケ書で「主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません」(4:15)と語る。この時パウロは、自分の生涯の間に主が再臨すると信じていた。
- 1コリント書でも「わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます」(15:51-52)と言う。
- 41 1テサ 4:14、1コリ 15:20
- 42 Holtz, Traugott 前掲書 206頁
- 43 言行録 19:21、23:11 も参照
- 44 Geoghegan, Arthur *ibid.* p.113
- 45 Geoghegan, Arthur *ibid.* p.114